

外来語の音節構造とアクセント

坂本清恵

1. はじめに

外来語アクセントについて、「平板化(無核化)」という現象が言われ、その要因についていくつかの説明がなされている。

- (1) なじみ度(単語親密度)によるもの
- (2) 「専門家アクセント」「業界アクセント」、若者による発音
- (3) 単語音節構造によるもの

(1)と(2)は上野(2002)のいう「話者との関係を表す意味」をアクセントによって表示しようという点で共通点を持つ。(1)は古く入った外来語などの場合で、外来語意識を消失し、和語の多数形アクセントに類推し、平板化する。なじみ度が高い外来語であっても、平板化しにくい「テレビ・ラジオ」もあるが、一般には単語として古くから使われ、なじみ度の高い外来語が平板化しやすいといわれてきた¹。(2)は、専門領域から始まり、外来語アクセントが「なじみ」の形である平板型をとることでの落差が目立ち、不快感を与えたりした(秋永2002)。また、一方でこの落差が新しさを持つことから、新たな外来語、例えば「ガーデニング」などは、初めから平板型アクセントで受け入れられた(秋永1999)という。現在の若者にとっては、かつての専門家アクセントといわれたものが、最初から平板型である場合も多い。例えば、パンプスなど平板型で使用し、頭高型に違和感を覚えるようである。

佐藤・坂本・松本(2003)では、「毎日小学生新聞」、「毎日中学生新聞」に現れた外来語のうち、4拍語200語に対する調査により、なじみ度の高い語と、なじみ度の低い語の両極端の単語が平板化しやすいことを明らかにした。同時に、すでに外来語となっている英単語を発音する際、外来語としてなじみ度の低い単語と、英単語としてなじみ度の低い語を、ストレスをつけず平板型アクセントで発音するという母語干渉の影響がみられることを明らかにした。

¹秋永一枝(1999)「アナウンサーアクセント調査について」(『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂⑧)『放送研究と調査』3月には、近代に多用されたポルトガル語やオランダ語出自のものが日本語に定着したときに平板型でなかったという確証はないという。

(3)は、単語の音節構造に平板化の要因を求めるもので、(1)(2)とは大きく異なるところだが、これは平板化をどう捉えるかの相違である。(1)(2)の場合には、外来語として有核アクセントであった単語が、無核である平板型アクセントに変わることを平板化(無核化)と捉えている。これに対して、窪菌(1998など)の単語アクセントの音節構造との関係に拠る説明は、外国語を外来語として日本語化する場合が主で、「たとえば外来語アクセント規則を見てみると、外来語で無核化(平板化)してしまう例の大半は4モーラの長さを有し、かつ「語末の2音節が軽音節」である場合である。」というものである。窪菌は外来語アクセントの平板化をなじみ度に求めるのは定量的に見ると大きなものではないとする。

(1)(2)と(3)とでは、アクセントの意味機能にその要因を求めるのか、音節構造にその要因を求めるのかの相違がある。なじみ度が平板化に関与しないという考え方によるとすると、近年の平板化も音節構造にその要因を求めることが可能であるであろうか。本稿では、主にこの点について、秋永一枝編(2001)『新明解アクセント辞典』三省堂(以下、『明解ア』とする)を資料に、外来語アクセントの音節構造とアクセント型の関係を中心に考察する。

2. 拍数とアクセント型

考察に先立って、外来語アクセントについて、名詞一般との相違を明らかにしておく。

秋永(2001)『明解ア』の解説では、外来語の単純語アクセントについて、以下のように述べられている。(一部用語を書き換えた)

- (1) 2拍語一原則として頭高型
- (2) 3拍語一原則として頭高型。但し、引き音で終わるものは、原語のアクセントが影響する。
- (3) 4拍語一頭高型が過半数に近いが、次いで2型が、次に平板型がこれに続く。
- (4) 5拍以上の語一終りから3拍めまで高い型が多い。但し、終りから3拍めが引き音・撥音・促音などで、そこにアクセントの切れめがくると、その切れめが前にずれる。

以上を数量的に確認するために、『明解ア』記載の外来語のアクセン

トについて、アクセント型の比率を拍数ごとの延べ語数でみる²。集計にあたって、複数アクセント注記と、複数語形のある場合とは、別語扱いで加算した。たとえば、フィアンセは2型、1型の両型を加算、スムーズとスムーズは2型に2例として扱った。なお、以下では、平板型は0型、頭高型は1型、尾高型は-1型、など、必要に応じて核の位置を語頭から数えた場合と、語末から数えた場合とで示す。なお、近年変化したものとして《新は》の注記のあるアクセント型についてはここでは扱わず、4で別に考察をする。

また、外来語アクセントの特徴をみるために、秋永(2002)で示された名詞一般のアクセント型別との比較を表にした。

<表1><表3>には語頭からアクセント核の位置を示し、<表2><表4>には語末からアクセント核の位置を示した。

<表1> 外来語拍数別アクセント型所属語数1

	0型		1型		2型		3型		4型		5型		6型		7型	
2拍	2	1.2%	164	97.0%	3	1.8%										
3拍	68	7.2%	819	87.1%	42	4.5%	1	0.1%								
4拍	265	20.1%	602	45.6%	423	32.0%	31	2.3%								
5拍	54	6.8%	207	26.1%	187	23.6%	337	42.4%	9	1.1%						
6拍	6	1.8%	25	7.5%	53	15.8%	98	29.3%	151	45.0%	2	0.6%				
7拍	1	1.2%	2	2.5%	6	7.4%	8	9.9%	33	40.7%	30	37.0%	1	1.2%		
8拍									2	11.8%	10	58.8%	5	29.4%		
9拍											1	25.0%	1	25.0%	2	50.0%
合計	396	10.8%	1819	49.8%	714	19.5%	475	13.0%	195	5.3%	43	1.2%	7	0.2%	2	0.1%

<表2> 外来語拍数別アクセント型所属語数2

	0型		-1型		-2型		-3型		-4型		-5型		-6型		-7型	
2拍	2	1.2%	3	1.8%	164	97.0%										
3拍	68	7.2%	1	0.1%	42	4.5%	819	87.1%								
4拍	265	20.1%			31	2.3%	423	32.0%	602	45.6%						
5拍	54	6.8%			9	1.1%	337	42.4%	187	23.6%	207	26.1%				
6拍	6	1.8%			2	0.6%	151	45.0%	98	29.3%	53	15.8%	25	7.5%		
7拍	1	1.2%			1	1.2%	30	37.0%	33	40.7%	8	9.9%	6	7.4%	2	2.5%
8拍							5	29.4%	10	58.8%	2	11.8%				
9拍							2	50.0%	1	25.0%	1	25.0%				
合計	396	10.8%	4	0.1%	249	6.8%	1767	48.4%	931	25.5%	271	7.4%	31	0.8%	2	0.1%

² 秋永一枝(2003)「池田京都アクセントと東京アクセント一名詞の型傾向」『池田要 京都・大阪アクセント資料 分析編』アクセント史資料索引別冊に『明解A』の「外来語及び外来語を後部成素とする名詞の拍数別型比較」が掲載されているが、今回は単純外来語のみをまとめた。

<表3>名詞一般と外来語との比較1

	0型		1型		2型		3型		4型		5型		6型		7型	
	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語
2拍	17.4%	1.2%	63.2%	97.0%	19.3%	1.8%										
3拍	50.0%	7.2%	37.7%	87.1%	5.8%	4.5%	6.5%	0.1%								
4拍	68.8%	20.1%	8.6%	45.6%	10.6%	32.0%	8.1%	2.3%	3.9%							
5拍	26.8%	6.8%	3.0%	26.1%	10.1%	23.6%	49.1%	42.4%	7.1%	1.1%	4.0%					
6拍	19.6%	2.1%	0.8%	7.5%	1.0%	15.8%	35.8%	29.3%	35.7%	45.0%	6.1%	0.6%	1.0%			
7拍	2.5%	1.2%	0.2%	2.5%	0.3%	7.4%	0.8%	9.9%	32.8%	40.7%	58.3%	37.0%	5.0%	1.2%	0.1%	
8拍										11.8%		58.8%		29.4%		
9拍												25.0%		25.0%		50.0%

<表4>名詞一般と外来語との比較2

	0型		-1型		-2型		-3型		-4型		-5型		-6型		-7型	
	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語	一般	外来語
2拍	17.4%	1.2%	19.3%	1.8%	63.2%	97.0%										
3拍	50.0%	7.2%	6.5%	0.1%	5.8%	4.5%	37.7%	87.1%								
4拍	68.8%	20.1%	3.9%		8.1%	2.3%	10.6%	32.0%	8.6%	45.6%						
5拍	26.8%	6.8%	4.0%		7.1%	1.1%	49.1%	42.4%	10.1%	23.6%	3.0%	26.1%				
6拍	19.6%	1.8%	1.0%		6.1%	0.6%	35.7%	45.0%	35.8%	29.3%	1.0%	15.8%	0.8%	7.5%		
7拍	2.5%	1.2%	0.1%		5.0%	1.2%	58.3%	37.0%	32.8%	40.7%	0.8%	9.9%	0.3%	7.4%	0.2%	2.5%
8拍								29.4%		58.8%		11.8%				
9拍								50.0%		25.0%		25.0%				

名詞一般については、秋永(2002)にあるように、0型が最多であり、4拍語68.8%をいただきとして3拍50.0%・2拍17.4%と5拍26.8%・6拍19.6%・7拍2.5%を分けたきれいな山形を作り、1型は拍数が多くなるにつれ、急速に所属語彙を減らす。

これに対して、外来語は、上記秋永による解説のとおり、4拍までは1型が最多型であり、名詞一般で所属の多い0型の比率が非常に低い。外来語の0型は、名詞一般のピークである4拍でも20.1%にすぎない。<表1>～<表4>のように、外来語のアクセントは、拍数が増えても1型の比率が名詞一般に比べて高く、拍数が多くなるにつれて、-3型の所属語彙が増えるといえる。

しかし、一見すると7拍語と8拍語では-3型よりも-4型の方が多い。7拍では、-3型30語、-4型33語であり、8拍では、-3型5語、-4型10語である。これは、特殊拍が-3の位置にくるために、核が前にずれたもの「見なし-3型」として扱えられるものと思われる。

そこで、<表5>に7拍語の-3型、-4型の決め手となる語末の2音節の構造を示した。Lは軽音節(light syllable)、Hは重音節(heavy syllable)、+は前部を省略したことを表す。

<表 5> 7 拍語語末音節とアクセント型

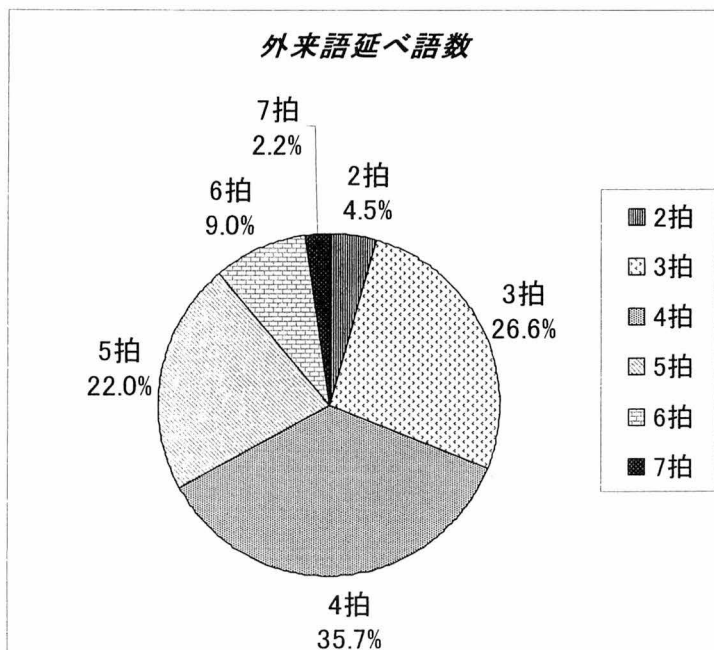
7拍	0型	-7型	-6型	-5型	-4型	-3型	-2型	-1型	
	0型	1型	2型	3型	4型	5型	6型	7型	構成合計
+LLL	0	0	0	2	0	7	0	0	9
+HLL	0	0	0	0	7	0	0	0	7
+LH	0	0	0	2	5	1	0	0	8
+HL	1	2	5	4	1	21	0	0	34
+HH	0	0	1	0	20	1	1	0	23
合計	1	2	6	8	33	30	1	0	81

7 拍語でもっとも多いのが、+HLで終わる場合であり、-3型 21 例である。これは「インフルエンザ・コレステロール・パラリンピック」などである。+HHで終わる-4型も 20 語ありこれに並ぶ。語末音節がHHのものは、「アソシエーション・エキスパンダー・コンプレッサー・パイプレーター」などで、語末がHHであるということは、-3 に特殊拍がくるということであり、-3 ではアクセント核が担えず、-4 にずれたと考えられる。また、+LHは-4型が 5 例で他よりも多いが、語例の「オリジナリティー・コスモポリタン・トランジスター・パーソナリティー・ボードビリアン」は原語「originality・cosmopolitan・transistor・personality・vaudevillian」の強勢位置とアクセント核が一致している。

8 拍語では、-3型は「エキセントリック・エレクトロニクス・ジャーナリスティック・ファンタスティック」で、語末音節がLLとHLの例である。-4型 10 語のうち、「イラストレーター・インスピレーション・エンターテイナー・オリエンテーション・デモンストレーション・トランクリャイザー・フラストレーション・モータリゼーション」は語末音節HHで、-3 に特殊拍があり、核が前にずれたものである。残りの 2 例「インストラクター・コンストラクション」は、-3 がともに「ク」であり、ともに後接が無声子音であり、母音の無声化により核がずれたものであろう。

7 拍、8 拍語の-4型の例はいわゆる「見なし-3型」として扱えるものであり、拍数が増えると、-3型の所属語が増えるという規則に問題はない。

なお、『明解ア』の外来語の単純語の拍数別語彙数は、次のグラフに「外来語延べ語数」として示した。名詞一般(秋永 2002)よりも 4 拍語が 5.7%少なく、3 拍語が 3.8%、5 拍語が 6.6%多い。



以上のように、明らかに外来語特有のアクセント分布が認められるが、それでは、外来語アクセントはどのように決まるのであろうか。遠藤(1969)、柴田(1994)、窪菌(1996)などによる研究がある。

まず、遠藤(1969)は、東京アクセントでは、原語アクセントが語頭にあると、その70%は外来語で頭高型に、2拍目や、それ以下にアクセント核を持つ語は、その67%が中高・尾高型になることを明らかにした。また、原語が1音節で外来語が4拍語になる単語のうち、頭高型には、原語ウ段の語がまったくみられず、ウ段を含む語は、語頭の子音連続の開音節化に際してウが挿入され、頭高型以外の型になることを示した。

柴田(1994)では、さらに詳細にどの型に決まるかを調査している。外来語のアクセントは在来語のアクセントに同調しないこと、原則的に-3型が外来語アクセントの指定ルールであることを提示している。

窪菌(1996ほか)では、4拍の外来語地名のアクセントの音節の長さを分析し、最後の2音節がともに1拍である語が平板化するという。また、LHL構造のうち、語末に/o/を挿入する語は、LHL構造の平板化する語の69%、LHL構造全体の46%にあたるという。詳しくは3で検討する。

〈表1〉〈表2〉に示したとおり、外来語のアクセントは1型が外来語全体の49.8%で、-3型が48.4%である。核の位置を語頭から数えても、語末から数えても、最多の3拍語が含まれる。外来語4拍語までは、原語が1音節の語が多く、5拍以上の外来語の原語になると、原語自体が派生語であり、1型ではなく、-3型で実現する。すなわち、4拍語までが1型アクセントに集中し、5拍以上になると-3型に収斂していくことになり、大まかな傾向として、外来語のアクセントは原語の音節数とアクセントにより決まるといえる。

しかし、4拍語は0型が2割もあり、アクセントが分散している。上記の例外を生む要因があるためと思われる。以下、5拍語まで拍数ごとにアクセント傾向と、アクセント型決定の要因について検討を行う。

3. 外来語の音節構造とアクセント

窪菌(1996ほか)は、4拍の外来語地名のアクセントで、アクセントの平板化について音節構造とアクセントからその理由を述べており、特に軽音節連続で終わる場合に89%が平板化するという。これが、外来語地名にとどまらず、一般の外来語においても成り立つ規則であるのか、また、4拍語のみに有効な規則なのか、他の拍数でも何らかの音節構造がアクセントの決定に関与するのかどうかを検討する。

3.1 外来語2拍名詞

2拍	0型	-2型	-1型	
	0型	1型	2型	構造合計
LL	2	136	3	141
H	0	28	0	28
型合計	2	164	3	169

〈音節構造別比率〉

2拍	0型	-2型	-1型	
	0型	1型	2型	構造比
LL	1.4%	96.5%	2.1%	83.4%
H	0.0%	100.0%	0.0%	16.6%

〈アクセント型別比率〉

2拍	0型	-2型	-1型
	0型	1型	2型
LL	100.0%	82.9%	100.0%
H	0.0%	17.1%	0.0%
型比	1.2%	97.0%	1.8%

2拍名詞は、略語が異なり語数で40語含まれるが、特にそうでない語との差はなく、ほぼ1型である。

LL型には、20語の省略語があり、すべて1型をもつ。1型の例外がみられ、0型は「ゲラ・ヒレ」、2型(-1型)は「スト・ラオ・ラウ」である。「スト」は2型と1型の併用であり、省略語と古い語が1型の

例外になる。特に、外来語で-1型の例は2拍語のこの3例と、3拍語の「ヒット(古くは)」のみである。

3.2 外来語3拍名詞

<延べ語数>

3拍	0型	-3型	-2型	-1型	
	0型	1型	2型	3型	構造合計
<i>LLL</i>	28	235	21	0	284
<i>HL</i>	24	443	0	1	468
<i>LH</i>	16	127	29	0	172
<i>H</i>	0	14	2	0	16
型合計	68	819	52	1	940

<音節構造別比率>

<アクセント型別比率>

3拍	0型	-3型	-2型	-1型	
	0型	1型	2型	3型	構造比
<i>LLL</i>	9.9%	82.7%	7.4%	0.0%	28.7%
<i>HL</i>	5.1%	87.7%	0.0%	0.2%	47.2%
<i>LH</i>	9.3%	73.8%	16.9%	0.0%	17.4%
<i>H</i>	0.0%	87.5%	12.5%	0.0%	1.6%

3拍	0型	-3型	-2型	-1型
	0型	1型	2型	3型
<i>LLL</i>	41.2%	28.7%	40.4%	0.0%
<i>HL</i>	35.3%	54.1%	0.0%	100.0%
<i>LH</i>	23.5%	15.5%	55.8%	0.0%
<i>H</i>	0.0%	1.7%	3.8%	0.0%
型比	7.2%	87.1%	5.5%	0.1%

3拍外来語で、もっとも多いのが*HL*構造1型の443例、続いて*LLL*構造1型の235例、*LH*構造1型の127例であり、どの構造においても1型が極めて多い。特に*HL*構造1型は、「アート・アーム・アイス・アップ・インチ・ウール」などで、もっとも用例数が多い。音節構造別比率でみると、1型はそれぞれ*HL*の87.7%、*LLL*の82.7%、*LH*の73.8%である。3拍語の場合には1型が-3型でもある。

0型はアクセント型比率でみると*LLL*が多数形で41.2%だが、用例数をみると*LLL*は28例、*HL*は24例であり、大差はない。また、*LLL*構造の語は、「オクラ・ガラス・キセル・サドル・タバコ・バルブ・ブリキ・ベニヤ・ベルト・ボトル・ボルト・カボチャ・フェルト」など、古くから使われてきたか、原語が英語以外である単語である。*HL*の0型の24例中11例は他型との併用で、1型との併用10語は「タイヤ・ハート・バンド」など有核型から変化したものである。

2型は*LH*が69.0%、「グリーン・グレー・トライ」などである。2型は、特殊拍が核を担えないために、*HL*の例がない。2型になる例は、超重音節である*H*「クイン・ツイン」も含め、最終拍が特殊拍の場合であり、特殊拍の直前にアクセント核がくる。1型の例外になる*LH*音節構造は、原語の語頭に母音/u/の挿入されるものが2型になるというが(柴田1994)、確かに22例中17例の「green・crew・clay・gray・grey・stew・

ski・star・spy・span・spin・spoon・slow・free・blue・play・floor」
 がこれにあたる。これは先に2で挙げた遠藤(1969)の指摘のとおりである。

3型1例は「ヒット」で「古くは」とある例であり、現在1型である。

3.3 外来語4拍名詞

<延べ語数>

4拍	0型	-4型	-3型	-2型	-1型	
	0型	1型	2型	3型	4型	構造合計
<i>LLLL</i>	116	59	71	6	0	252
<i>HLL</i>	59	129	2	6	0	196
<i>LHL</i>	41	78	272	0	0	391
<i>HL</i>	2	2	10	0	0	14
<i>LLH</i>	33	137	50	3	0	223
<i>LH</i>	0	0	17	0	0	17
<i>HH</i>	14	197	1	16	0	228
型合計	265	602	423	31	0	1321

<音節構造別比率>

4拍	0型	-4型	-3型	-2型	
	0型	1型	2型	3型	構造比
<i>LLLL</i>	46.0%	23.4%	28.2%	2.4%	19.1%
<i>HLL</i>	30.1%	65.8%	1.0%	3.1%	14.8%
<i>LHL</i>	10.5%	19.9%	69.6%	0.0%	29.6%
<i>HL</i>	14.3%	14.3%	71.4%	0.0%	1.1%
<i>LLH</i>	14.8%	61.4%	22.4%	1.3%	16.9%
<i>LH</i>	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	1.3%
<i>HH</i>	6.1%	86.4%	0.4%	7.0%	17.3%

<アクセント型別比率>

4拍	0型	-4型	-3型	-2型
	0型	1型	2型	3型
<i>LLLL</i>	43.8%	9.8%	16.8%	19.4%
<i>HLL</i>	22.3%	21.4%	0.5%	19.4%
<i>LHL</i>	15.5%	13.0%	64.3%	0.0%
<i>HL</i>	0.8%	0.3%	2.4%	0.0%
<i>LLH</i>	12.5%	22.8%	11.8%	9.7%
<i>LH</i>	0.0%	0.0%	4.0%	0.0%
<i>HH</i>	5.3%	32.7%	0.2%	51.6%
型比	20.1%	45.6%	32.0%	2.3%

4拍外来語は2の<表3>のとおり、4拍一般名詞が0型を最多とし、68.8%を占めるのに対して、0型が20.1%に過ぎない。アクセント型としては、1型(-4型)602語>2型(-3型)423語>0型265語で、1型が45.6%で最多である。

音節構造とアクセント型からみると、最多は2型(-3型)の*LHL*構造272語、続いて1型(-4型)の*HH*構造197語、1型の*LLH*構造137語、1型の*HLL*構造129語、0型の*LLLL*構造116語である。-3型が少ないのは、-3に特殊拍の来る*HLL*、*HL*、*HH*が325語と多いためでもある。

3.3.1 *LHL*構造について

4拍外来語の音節構造の最多が*LHL*構造391語(29.6%)であり、そのうちの2型(-3型)272語が4拍外来語の最多であるとともに、

外来語全体で3拍語の*LHL*構造468語のうち、1型443語に続く典型的なタイプということになる。この*LHL*2型(-3型)は、「エリート・オパール・オミット・オリーブ・オレンジ・カセット・カラット」などで、特殊拍直前に核がくる。*LHL*で1型(-4型)は、「ガボット・カレッジ・キュロット・コテージ・コミック・コメント・サウンド」など78語ある。*LHL*のうち、47例が1型と2型との併用例であり、1型でも2型でも、特殊拍などの条件で核がずれる構造ではない。

それでは、どのような条件により1型と2型に分かれるのか。3拍語同様に、遠藤(1969)指摘の語頭の子音連続に/u/が挿入されたかどうかによると考えてよさそうである。

すなわち、*LHL*構造で2型(-3型)のみのアクセントの語例(複数アクセント例のないもの)のうち、英語アクセントがわかる170語について、その強勢位置をみると、128語の主強勢が第1音節にあり、42語が第2音節にある。

主強勢が第2音節にある場合には、原語のアクセントと外来語のアクセント核が一致する。「attack・appeal・omit・naïve」が2型「アタック・アピール・オミット・ナイーブ」になる。原語が1音節であるか、主強勢が第1音節にある128語のうち、原音の語頭の子音連続に母音が挿入されて外来語になったもの98語76.6%、/u/が挿入されたものはそのうち88語68.8%である。「glove・crank・creek・grease・cream・prince・blues・fruits・brake・fresh」などが語頭子音連続に/u/を挿入し、2型「グローブ・クランク・クリーク・グロース・クリーム・プリンス・ブルース・フルーツ・ブレイク・フレッシュ」となる。128語例中127語が、語頭の子音連続あるいは語末に母音が添加した例で、外来語化する段階で2型になったものである。

一方、*LHL*構造で1型のみの語例(複数アクセント例のないもの)で英語アクセントのわかる17語すべて、主強勢が第1音節にある語である。「inning・college・cottage・summit・cynic・tonic」など語末の母音添加のみで、1型「イニング・カレッジ・コテージ・サミット・シニック・トニック」になる。この場合には原語のアクセントを保つ。

また、窪菌は、*LHL*構造のうち語末に/o/を挿入する語は、平板化傾向がみられる。*LHL*構造の単語の語末母音添加とアクセント型の例をみると、以下の表とグラフのようになる。

<i>LHL</i>	0型		1型		2型		合計
語末o添加	29	24.8%	29	24.8%	59	50.4%	117
語末i添加	1	3.4%	8	27.6%	20	69.0%	29
語末u添加	5	2.5%	36	18.0%	159	79.5%	200
語頭u挿入	19	15.3%	2	1.6%	103	83.1%	124

*LHL*のうち0型になるのは41語であり、そのうちの29語が/o/を添加した語であると見れば、70.7%が0型になる。0型になる語はほかには/i/を添加した「スポンジ sponge」と、「jogging・dubbing・balance・bronze・merinos」が/u/を添加した「ジョギング・ダビング・バランス・ブロンズ・メリンス」である。*LHL*構造で0型になる語のうち、英語が原語のアクセントの強勢が第2音節にある「イベント event」を除けば、すべて主強勢が第1音節である。型を分けるのに原語のアクセントの影響はなく、語末の添加された母音の別によるとみたくなる。

しかし、表のように*LHL*構造で語末に/o/が添加される117語のうち、最多は2型59語の50.4%であり、0型になるのは29語の24.8%である。/o/が語末に添加する語が平板化するとはいえない。

3.3.2 4拍アクセント型と音節構造

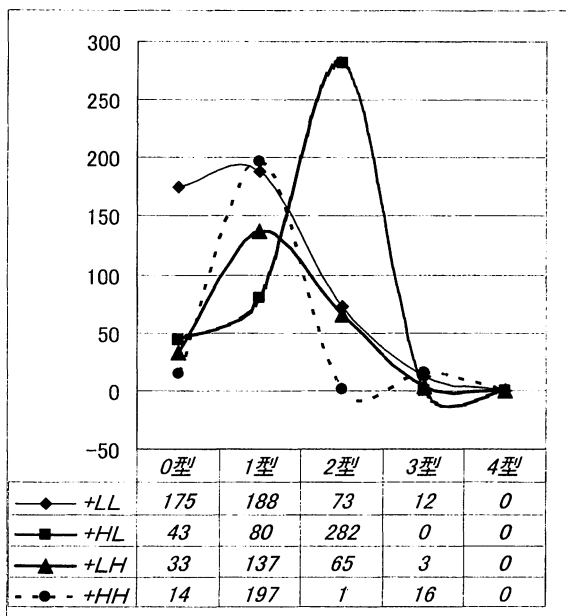
その他、4拍語について、それぞれ構造別に割合が多いものをみると、*LLLL*構造のみが0型を最多とし、構造中46.0%であるが、他のすべての構造での最多型が1型と2型(-3型)のどちらかである。1型が602語で最も多く、さらに1型を最多とする構造は、*HH*の86.4%、*HLL*の65.8%、*LLH*の61.4%である。2型(-3型)は423語であり、これを最多とする構造は、*LH*が17語100%をはじめ、*HLL*71.4%、*LHL*69.6%である。

[4拍語0型]

一般名詞では4拍語の0型が最多であるが、典型的な4拍外来語の語形が*LHL*構造であることを考えると、特殊拍を含まない*LLLL*は外来語らしくない構造で、*LLLL*構造に外来語アクセントらしくない0型が多いということになる。*LLLL*の例は「アルバム・シナリオ・スタミナ・マスカラ・モルタル」などである。

4拍語の外来語地名のアクセントで、軽音節連続で終わる場合に89%が平板化するといわれているが(窪菌1996など)、地名以外でも同様の傾向があるのか、語末の2音節と型との関係を別のグラフにしてみる。グラフには語末音節によってどのアクセント型をとるかを示した。

<グラフ1> 4拍語の語末構造とアクセント



語末のアクセント型別からみると、軽音節で終わる+LLが265語中175語で65.3%になる。確かに0型では語末2音節軽音節が多いが、+LL構造では、1型の188語よりも少なく、語末2音節が軽音節であることが0型になる条件とはいえない。一般外来語は、地名に比べると、語末音節を条件として0型になることはない。グラフからは、語末音節が+HLの場合には2型(-3型)に、+HHの場合、および+LHの場合に1型になりやすいことがわかる。+LLは1型あるいは0型になる。

地名と一般外来語の相違をみるために、窪菌の示した地名の0型占有率と、平板化率と『明解ア』を表にまとめた。

タイプ	LLLL	HLL	LHL	LLH	HH
『明解』占有率	116/265(44%)	59/265(22%)	41/265(15%)	33/265(12%)	14/265(5%)
地名占有率	52/71(73%)	13/71(18%)	2/71(3%)	4/71(6%)	0/71(0%)
『明解』平板型	251/116(46%)	59/196(30%)	41/391(10%)	3/223(15%)	14/228(6%)
地名平板化率	52/78(67%)	13/33(39%)	2/40(1%)	4/34(12%)	0/21(0%)

『明解ア』LLLLの0型占有率、平板率とも50%未満ではあるが、4拍語のLLLL構造は0型になりやすいという点は地名と変わらない。しかし、先にも述べたとおり、HLL構造は1型(-4型)が129例、0型が59例あり、LLLL構造とともに語末の+LLとして一括して扱

うことはできない。語末音節が *LL* である場合というところまで広げてしまうと、一般外来語は 1 型が多くなるため当てはまらなくなる。

次に、語末に軽音節が続くと 0 型アクセントになるのは、4 拍語だけの特徴かどうかを確認するために、語末が *LL* 構造になるものについて、アクセント型との関係を表にした。

		0型	-1型	-2型	-3型	-4型	-5型	-6型	合計	0型率
2拍語	<i>LL</i>	2	3	136					141	1.4%
3拍語	<i>LLL</i>	28	0	21	235				284	9.9%
4拍語	<i>LLLL</i>	116	0	6	71	59			252	46.0%
4拍語	<i>HLL</i>	59	0	6	2	129			196	30.1%
5拍語	<i>LLLLL</i>	3	0	2	63	14	6		88	3.4%
5拍語	<i>LHLL</i>	1	0	0	1	28	1		31	3.2%
5拍語	<i>HLLL</i>	4	0	3	21	0	30		58	6.9%
5拍語	<i>HLL</i>	0	0	0	0	1	0		1	0.0%
6拍語	<i>LLLLLL</i>	0	0	1	27	3	2	0	33	0.0%
6拍語	<i>HLLLL</i>	0	0	0	9	3	0	3	13	0.0%
6拍語	<i>LHLLL</i>	0	0	1	8	2	0	0	11	0.0%
6拍語	<i>LLHLL</i>	0	0	0	0	7	0	0	7	0.0%
6拍語	<i>HHLL</i>	0	0	0	0	4	0	0	4	0.0%

2 拍語、3 拍語については、すでに述べたとおりで、*LL・LLL* が 0 型になるのは、英語以外の語源の語や古くから使われている語で、音節構造にはかかわりがない。

5 拍語にも 0 型があるが、*LLLLL* は「ジフテリア・ジフテリア・バクテリア」の 3 語で、*HLLL* は「ハーモニカ・アンモニア・アンモニヤ・パイオニア」の 4 語、*LHLL* は「フランネル」の 1 語である。5 拍の *LLLLL* は多拍語の安定型-3 型に集中している。6 拍語になると、語末に軽音節が続いても 0 型になる例は皆無で、安定型である-3 型が多い。つまりは、4 拍語の *LLLL* のみが 0 型になる傾向を持っていることがわかる。

これらについては、日本語としての単純語を考察対象にしているものの、5 拍語以上は、原語自体が派生語である場合が多くなり、語形も自ずと類似してくることによると考えられる。

[4 拍語 1 型]

最多の語数になる 1 型は、*HH* が 197 語のうち、中国語語源などの語を除く 173 語中、170 語が主強勢が第 1 音節にある語である。*HLL* も強勢のわかる 93 語のうち「コンテナ (container)」のみ強勢が第 2 音節にあり、残りはすべて第 1 音節にある。原語のアクセントを生かし、語頭の *H* にアクセント核をおいている。これに対して語末に特殊拍の来る *LLH* も 1 型アクセントになる。英語語源のうち主強勢が第 2 音節にある語は 2 型、《新は 0 型》の併用例のある「ビギナー (beginner)」の

みで、残りの 111 語は主強勢が第 1 音節にあるのである。これらも原語のアクセントを生かしている。

[4 拍語 2 型]

2 型、すなわち-3 にアクセント核がくる語は、すでに取り上げた *LHL* 構造が全体の 63.8% を占める。その他は、*LH* 構造 17 語すべてがこのアクセント型である。*LH* 構造は、語末が超重音節の「クレーン・クローン・コカイン・コミュニケーション・スコーン・デザイン」などであり、特殊拍直前にアクセント核がくるが、語末が撥音で、その前も特殊拍という例である。また、*HL* も 10 語「ウイット・ウインク・クイック・スイッチ・ツイード・ホイップ」などで、原音はすべて強勢が第 1 音節にある例で、「wit・wink・quick・switch・tweed・whip」など接近音を母音/u/に変えて、-3 型にアクセント核をもってきている。これらは、第 2 拍が連母音で、3 拍が連母音以外の特殊拍であり、この場合をみると連母音はアクセント核を担えることになる。

[4 拍語 3 型]

ごく少ないが、3 型（-2 型）の語は、外来語の例外的なアクセント型である。*HH* 構造が 16 語と多いが、「コーヒー・シャンパン・シャンペン・チャーシュー・ボンタン・ボンボン・ムームー・ヨーヨー・ランタン・ワントン」など、すべて英語語源以外の単語である。*HLL* 「アイディア・エンジョイ・コンペヤ」は、原語の主強勢が第 2 音節にあり、アクセント核と一致する例である。

3.4 外来語 5 拍名詞

5拍	0型	-5型	-4型	-3型	-2型	
5拍	0型	1型	2型	3型	4型	構造比
<i>LLLLL</i>	3	6	14	63	2	88
<i>LHLL</i>	1	1	28	1	0	31
<i>HLLL</i>	4	30	0	21	3	58
<i>HLL</i>	0	0	1	0	0	1
<i>LLHL</i>	3	48	23	154	1	229
<i>HHL</i>	19	66	2	49	0	136
<i>LHL</i>	1	0	1	3	0	5
<i>LLLH</i>	11	10	40	17	2	80
<i>LLH</i>	0	1	0	8	0	9
<i>HLH</i>	6	42	2	17	1	68
<i>LHH</i>	4	1	70	0	0	75
<i>HH</i>	2	2	6	4	0	14
型合計	54	207	187	337	9	794

< 音節構造別比率 >

5拍	0型	-5型	-4型	-3型	-2型	
	0型	1型	2型	3型	4型	構造比
<i>LLLLL</i>	3.4%	6.8%	15.9%	71.6%	2.3%	11.1%
<i>LHLL</i>	3.2%	3.2%	90.3%	3.2%	0.0%	3.9%
<i>HLLL</i>	6.9%	51.7%	0.0%	36.2%	5.2%	7.3%
<i>HLL</i>	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.1%
<i>LLHL</i>	1.3%	21.0%	10.0%	67.2%	0.4%	28.8%
<i>HHL</i>	14.0%	48.5%	1.5%	36.0%	0.0%	17.1%
<i>LHL</i>	20.0%	0.0%	20.0%	60.0%	0.0%	0.6%
<i>LLLH</i>	13.8%	12.5%	50.0%	21.3%	2.5%	10.1%
<i>LLH</i>	0.0%	11.1%	0.0%	88.9%	0.0%	1.1%
<i>HLH</i>	8.8%	61.8%	2.9%	25.0%	1.5%	8.6%
<i>LHH</i>	5.3%	1.3%	93.3%	0.0%	0.0%	9.4%
<i>HH</i>	14.3%	14.3%	42.9%	28.6%	0.0%	1.8%

< アクセント型別比率 >

	0型	-5型	-4型	-3型	-2型
5拍	0型	1型	2型	3型	4型
<i>LLLLL</i>	5.6%	2.9%	7.5%	18.7%	22.2%
<i>LHLL</i>	1.9%	0.5%	15.0%	0.3%	0.0%
<i>HLLL</i>	7.4%	14.5%	0.0%	6.2%	33.3%
<i>HLL</i>	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%
<i>LLHL</i>	5.6%	23.2%	12.3%	45.7%	11.1%
<i>HHL</i>	35.2%	31.9%	1.1%	14.5%	0.0%
<i>LHL</i>	1.9%	0.0%	0.5%	0.9%	0.0%
<i>LLLH</i>	20.4%	4.8%	21.4%	5.0%	22.2%
<i>LLH</i>	0.0%	0.5%	0.0%	2.4%	0.0%
<i>HLH</i>	11.1%	20.3%	1.1%	5.0%	11.1%
<i>LHH</i>	7.4%	0.5%	37.4%	0.0%	0.0%
<i>HH</i>	3.7%	1.0%	3.2%	1.2%	0.0%
型比	6.8%	26.1%	23.6%	42.4%	1.1%

5拍語になって初めて1型207語よりも-3型が337語と多くなり、最多型が一般名詞と同様になる。音節構造とアクセント型をみると、最多は3型(-3型)*LLHL*構造156語、42.4%である。

[5拍語0型]

0型は3、4拍語とは異なり、最多が*LLLLL*ではなく、*HHL*、*LLLH*、*HLH*が多くなる。

*HHL*構造は、0型の35.2%を、1型の31.9%を占め、それぞれのアクセント型の最多の割合である。何がそれぞれの型への所属を決めるのだろうか。0型は原語がすべて第1強勢の語であり、-ingで終わる「エ

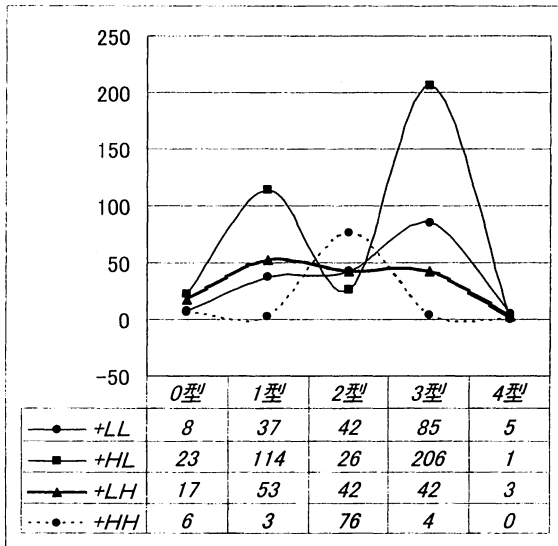
ツチンク°・カッティング°・カンニク°・コーティング°・タイミンク°・ツーリンク°・テーピンク°・ドーピンク°・トッピンク°・ネーミンク°・パッティング°・ピッチンク°・ヒッティング°・フィーリンク°・ボーリンク°・ラッピング°・ランニク°」で1型と3型に併用例のある語を含む。さらに、*HHL*構造では、1型は66語あり、0型の19語よりはるかに多いが、この66語のうち13語が《新は》が0型の-ingで終わる単語である。

また、0型で*HHL*の次に多い、*LLLLH*構造の11語も「アスピリン・アセチレン・アリナミン・オリザニン・グリセリン・ジュラルミン・ナフタリン・ヒスタミン・ペニシリン・ホルマリン・フォルマリン」で、すべて撥音で終わる。

以上をみると5拍語になると、原語自体も派生語であったり、類似の語形を持っていたりする語が、同じアクセント型に集まる傾向がある。

4拍語同様に、最終音節の構造とアクセントの関係をまとめると以下のようなものである。

<グラフ2> 5拍語の語末構造とアクセント



[5拍語1型]

原語が第1強勢の語は、1型207語中、172語にのぼり、原語のアクセントが生かされた型といえる。5拍語から1型が最多ではなくなるが、<グラフ2>の語末音節HLでは、3型(=3型)とともに二山のピー

クとなっており、『明解ア』における1型と3型(-3型)の両型記載語は「アーモンド・カーディガン・ガーネット・ソーセージ」など58語に及ぶ。

[5 拍語 2型]

2型(-4型)が187語と多いのは、*LHL*L構造「グローバル・デラックス・ボランティア」など、*HLL*構造「ホイッスル」、*LHH*構造「カレンダー・クレーター・コミッション・バケーション」など、*H**H*構造の「ウインター・レインジャー」など、-3に特殊拍の来る例が108語あるためである。特に、語末音節が*HH*である*LHH*構造と*HH*構造については、<グラフ2>のように他の音節構造と異なりこの2型に集中していることがわかる。また、5拍語でも、超重音節の例は連母音にアクセント核がくる。

-3に特殊拍がこない*LL**LH*「フラクション・ペナルティー・マタニティー・マホガニー・リアクション・リアリティー・レセプション・ロボットミー」なども2型が40語で構造上最多である。このうち、20語が「アカデミー・アダプター・イレギュラー・エコノミー」など原語のアクセントとアクセント核が一致、また原語が第1強勢の語である

「klaxon・Christian・scorer・tractor・fraction」で、語頭の子音連続に母音挿入された例である。

[5 拍語 3型]

-3型(3型)が最多となるのは、「みなし-3型」を含み、5拍以上語に共通する。なかでも、*LLHL*構造は「アセテート・アトミック・アノラック・アプローチ・イタリック」などは、構造比45.7%にのぼる。4拍語の最多型*LHL*同様-3の直後に特殊拍の来る形である。*LLHL*構造を持つ単語のうち、原語の強勢が第1音節以外のものほとんどが-3型になる。

4. 有核アクセントからの変化

4.1 《新》としての平板型アクセント

秋永(2001)『明解ア』では、平板化した外来語アクセントについては、習得法則9「外来語の単純名詞」に、「専門家や若年層の多用する語で、近年平板化したものには《新は…》と注記したが、人により平板化に差が多い場合には、平板型注記を割愛したものがあつた。」として別に取り上げている。

《新は》が0型の単語の元のアクセント型と、音節構造の関係をみると以下のとおりである。

2拍(1例)

1型(-2型)→0型 LL (1例) ロゴ

3拍(47例)

1型(-3型)→0型

LLL (12例) グラス・グラフ・サラミ・ドラム・ノズル・パネル…

HL (35例) ウッド・エッジ・ソート・データ・ネール・バイト…

4拍(69例)

1型(-4型)→0型 (43例)

LLLL (3例) パステル・ベクトル・マニュアル

LLL (15例) イースト・ゴーグル・コンテナ・ダンベル・ピッケル…

LHL (9例) コメント・サウンド・ジャケット・セカンド…

LLH (5例) ズルチン・パネラー・ビギナー・フィルター・メラニン

HH (11例) アイアン・オーダー・サーバー・バージョン・マイナー…

2型(-3型)→0型 (26例)

LLLL (9例) ゲバルト・スクラム・ドラフト・ドリブル…

LHL (13例) グレード・クレーム・コマンド・トレンド・ホワイト…

LLH (2例) スキャナー・ビギナー

HL (1例) ツイスト

HL (1例) ツイード

5拍(49例)

1型(-5型)→0型 (19例)

LLHL (4例) キャスティング°・キルティング°・ヒアリング°
レタリング°

HHL (13例) エンディング°・シーリング°・ダイビング°…

HLH (2例) コンテナ・バッテリー

2型(-4型)→0型 (28例)

LHL (1例) リハーサル

LLHL (2例) グラウンド・トリミング°

LHH (22例) クルーザー・スポンサー・デザイナー・プレッシャー…

LLLH (1例) ディレクター

HH (2例) ウィンカー・ポインター

3型(-3型)→0型 (2例)

LLLL (1例) サイネリア

LLLLL (1例) シネラリア

6拍(15例)

1型(-6型)→0型 (3例)

HLHL (3例) オープニング・サンプリング°・ナンバリング°

2型(-5型)→0型(10例)

LHHL (10例) クルージング°・スクーリング°・スライディング°

3型(-4型)→0型(2例)

LLLLH (1例) ポリエチレン

HLHL (1例) マーケティング°

	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語
+LL	1	12	29	3	0
上記以外	0	35	40	46	15

以上のように、近年の平板化は、すべての音節構造に現れ、語末音節構造の*LL*でない場合の方が平板化する率が高い。

多拍語になれば、原語自体も派生語が多くなり、同じタイプの派生語は同じように変化することも考えられる。5拍1型からは*LLHL*と*HHL*が、6拍でも1型の*HLHL*、2型の*LHHL*の-ingを持つ語が平板化している。同じタイプの構造のものが、互いに牽引しながら平板化するものとみられる。

4.2 《古》の注記がある外来語

秋永(2001)『明解ア』で、《古は》の注記がされている単語には、(1)音形の変化により拍数も変わる場合、(2)アクセント型が変化した場合とがある。

(1) 拍数変化の例

カフェー(1型)、カフェ(1型)、《古くカフェ(1型)》

フィルム(1型)《古はフィルム(0型)》

ポケット(2型)、ポケット(1型)、《古はポケット(3型)》

現在は、「フェ」「フィ」と発音されるが、かつては「フェ」「フィ」となった単語である。「カフェ」のアクセント型は変わらない。

(2) 《古は》が有核型

1型→0型(6例) ハート・ピアノ・モダン・アルバム・ニッケル・ライオン

2型→0型(3例) フライ・ウエート・ウインドー

3型→0型(1例) ランニング°

2型→1型(1例) トマト

3型→1型(1例) ヒット

《古は》が有核であったものが平板型になったものが10語、ほかの有核の型に移ったものが2語ある。後者のうち「ヒット」は、-1型が1型になった例であり、外来語の数少ない-1型例「スト・ラオ・

ラウ・ヒット」の一つがなくなったことになる。

5. 『明解ア』記載の外来語アクセント

『明解ア』記載の外来語のアクセントについて分析を行ってきたところをまとめると次のようになる。

- ① 外来語アクセント全体では、1型が49.7%、-3型が48.5%である。

4拍までの外来語は1型アクセントに集中し、5拍語以上は-3型に移る。これは、一般名詞のアクセントが、3拍、4拍が0型に集中するのは大きく異なる。また、外来語アクセントの決定には、先行研究にあるように、多くが原語のアクセントの影響を受ける。例外は、外来語化するときの母音添加や、特殊拍による音節変化によることが多い。

- ② 拍数別の音節構造とアクセント型による分類では、所属の多いものは以下のとおりである。これらが、典型的な外来語といえるのであろう。

3拍語のHLL構造1型「アート・アップ・インチ」など443語。

4拍語のLHLL構造2型(-3型)「エリート・オレンジ・カセット」など272語。

3拍語のLLL構造1型「ソフト・タオル・バナナ・モラル」など235語。

- ③ 外来語の平板化については、先行研究にあるように、史的にみれば、古くから使用されている単語、英語語源以外の単語が平板化する傾向にあるといえる。

4拍名詞については、LLL構造をもつ語が0型であられる率が他構造よりも高い。しかし、HLL構造では1型が0型の2倍以上あり、語末に軽音節がくると0型になるという説は適応しない。特殊拍を含まない音節構成が平板化しやすいわけではなく、軽音節だけの構造が0型になりやすいのは、4拍語だけの傾向である。

なお、4. でみたとおり、近年の平板化は音節構造とは関係がなく生じている。

- ⑤ 5拍以上の語になると、原語自体が派生語であったり、類似の語形を持っていたりして、外来語として同じアクセント型に集まる傾向がある。これらの語については、平板化についても互いに牽引し合うとみられる。

6. 無意味語アクセントの傾向

外来語はこれからも増加し、名詞一般のアクセント、あるいは英語をはじめとする外国語習得にも影響を及ぼしていくものと思われる。5で『明解ア』の外来語アクセントについてまとめたが、今回は記載語のなじみ度(単語親密度)との関係は分析対象にしなかった³。そこで、今後どのように外来語アクセントが変化する可能性があるのか、現在の多数型が影響を与えるのか、それとも平板型アクセントが増え続けるのかについて若干の見通しを考えてみたい。具体的には、なじみ度の低い外来語と、外来語とみなせる無意味語(擬似語)のアクセントを若者がどのように発音するのかを手がかりとする。

調査には首都圏出身(東京・神奈川)の大学生12名に対して、2拍語から5拍語まで無意味外来語(擬似語)および非常になじみ度が低い外来語、90語について視覚提示による音読課題をランダム行い、アクセントを調べ、『明解ア』との傾向を比べた。

結果は、12名のそれぞれの発話を延べ語数として傾向をみる。4,5拍語では、言い誤りが現れることがあり、それらについては集計からは外した。簡単に結果のみに触れておく。

拍数別に、アクセント型別、音節構造別にまとめ、全語例のアクセント型比率を示した。

2拍	0型		-2型			
	0型	明ア	1型	明ア		
LL	1	0.4%	1.4%	227	99.6%	96.5%

2拍語には、調査の刺激語として、「アガ・ゲラ・コピ・スチ・ダル・テヌ・バタ・ハロ・ピジ・ブディ・プド・ポケ・マフ・ミレ・モブ・ラド・リム・レホ・レム」の19語を用いたが、「アガ」を1名が0型で発音したのみで、すべて1型であった。

3拍	0型			-3型		-2型			
	0型	明ア		1型	明ア	2型	明ア		
LLL	9	6.9%	9.9%	118	90.1%	82.7%	4	3.1%	7.4%
HL	2	4.2%	5.1%	46	95.8%	87.7%	0	0.0%	0.0%
LH	4	6.7%	9.3%	43	71.7%	73.8%	13	21.7%	16.9%
H	0	0.0%	0.0%	12	100.0%	87.5%	0	0.0%	12.5%
型比	15	6.0%	7.2%	219	87.3%	87.1%	17	6.8%	4.5%

3拍の刺激語は「アキン・アロイ・オルク・シース・ジャケル・スカ

³天野成昭・近藤公久(1999)『日本語の語彙特性 第1巻：単語親密度』(NTTデータベースシリーズ)東京 三省堂

ツ・ダイン・タック・タルチ・チッキ・トラン・ナフサ・フラー・プラウ・フラサ・ボメロ・メソモ・ラッピ・ラペル・ルチフ・ワニス」の22語を用いた。

3拍語は傾向としては、『明解ア』と同じであるが、1型への集中が強くなっている。0型はLLL構造の「スカツ・タルチ・ラペル」、HL構造の「ラッピ」、LH構造の「アロイ・フラー」である。-2型は「アキン・アロイ・トラン・フラー」で、43例が1型であるが、特殊拍の直前に核が来る-2型も現れる。唯一、3拍語のLH構造のみ2型(-2型)の比率が増している。これは、特殊拍の直前に核が来るという傾向が顕著になっているためと考えられる。次の4拍語のLHL構造とLLH構造にも同様の傾向が見られる。

4拍	0型			-4型		-3型		-2型				
		0型	明ア	1型	明ア	2型	明ア	3型	明ア			
LLLL	24	33.3%	46.0%	47	65.3%	23.4%	0	0.0%	28.2%	1	1.4%	2.4%
HLL	1	2.1%	30.1%	45	95.7%	65.8%	0	0.0%	1.0%	1	2.1%	3.1%
LHL	4	5.8%	10.5%	9	13.0%	19.9%	56	81.2%	69.6%	0	0.0%	0.0%
LLH	8	33.3%	14.8%	13	54.2%	61.4%	0	0.0%	22.4%	3	12.5%	1.3%
HH	0	0.0%	6.1%	12	100.0%	86.4%	0	0.0%	0.4%	0	0.0%	7.0%
型比	37	16.5%	20.1%	126	56.3%	45.3%	56	25.0%	32.2%	5	2.2%	2.3%

4拍の刺激語は「カリパス・ギャバジン・サスック・セラプロ・ジャッグル・ジョンシル・スコンチ・スマック・タルカム・チッスン・ノミナル・ハシンク・ブップル・ベールズ・ペプラム・ポセカリ・メルトン・リポイド・レガラム・レギンス」の21語である。

4拍語では、『明解ア』に比べて0型が少なく、LHLを除けば、すべて1型が最多になっている。LHLについても、特殊拍の直前に核がくる比率が『明解ア』よりも多くなっており、音節構造とアクセント型の関係が、有意味のものよりも顕著である。

0型については、個人差が大きく、すべての拍数のすべての音節構造において1語も0型が出なかったのが1名いる。最も0型の出現が多かったのが90語中19語で、0型の出現は、平均で5.72語である。

LLLL構造では、なじみのない無意味語であっても、4拍外来語の33.3%の比率で平板型が現れている。LLLL構造すべて0型で発音したのが1名。HLL構造では12名中もっとも0型の出現した1名が「ジャッグル」を0型で発音しているのみである。このことから4拍語について、語末構造が軽音節のLLLL型とHLL型とを同質に扱えないことがわかる。

HH構造については、すべて1型であった。『明解ア』では、HH構造の-2型には、なじみ度の高い、英語以外の語源の単語があらわれていたが、今回の無意味語では、-2型は当然ながら全く現れない。

5拍	0型			-5型			-4型			-3型			-2型		
	0型	明ア		1型	明ア		2型	明ア		3型	明ア	4型	明ア		
LLLL	0	0.0%	3.4%	1	4.3%	6.8%	0	0.0%	15.9%	21	91.3%	71.6%	1	4.3%	2.3%
LHLL	0	0.0%	3.2%	0	0.0%	3.2%	21	84.0%	90.3%	4	16.0%	3.2%	0	0.0%	0.0%
HLLL	0	0.0%	6.9%	7	29.2%	51.7%	0	0.0%	0.0%	4	16.7%	36.2%	13	54.2%	5.2%
LLHL	1	1.2%	1.3%	13	15.9%	21.0%	2	2.4%	10.0%	66	80.5%	67.2%	0	0.0%	0.4%
FFHL	0	0.0%	14.0%	14	38.9%	48.5%	0	0.0%	1.5%	22	61.1%	36.0%	0	0.0%	0.0%
LLHH	2	5.9%	13.8%	1	2.9%	12.5%	1	2.9%	50.0%	26	76.5%	21.3%	4	11.8%	2.5%
HLHL	7	20.0%	8.8%	22	62.9%	61.8%	0	0.0%	2.9%	5	14.3%	25.0%	1	2.9%	1.5%
LHH	1	4.0%	5.3%	0	0.0%	1.3%	24	96.0%	93.3%	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0.0%
型比	11	3.9%	6.8%	58	20.4%	26.1%	48	16.9%	23.6%	148	52.1%	42.4%	19	6.7%	1.1%

5拍の刺激語は「アレゴマレ・オリキッド・カーバイド・ガガイズム・キスヤー・グリセイド・クロソイド・ゲッセリー・ケリッチア・コーテッド・コクテング・サントニン・シノプシス・ジベレトン・シルリング・ソクタイプ・タワレシン・ノスーケル・ハイブラウ・バックラム・フェロアンス・ユアザロイ・ラトククス・リクーミー・リプンター・ルーフォイル・レカンダー・ログーバル・ログッキー・ロングリン」の31語である。

5拍語については、全体としては、『明解ア』よりも-3型への集中が顕著である。語構造によっては、最多が『明解ア』と傾向の異なるものがみられた。HLLL構造と、LLLH構造である。HLLL構造は『明解ア』が特殊拍の直前にアクセント核の来る1型が51.7%であるのに対して、今回の刺激語は「ハイブラウ・バックラム」であるが、4型(-2型)が最多となった。

LLLH構造については、『明解ア』では原語アクセントの影響により2型(-4型)が50.0%と多いが、今回のなじみのない語の場合には、は安定型の-3型になるということであろう。

7. おわりに

外来語アクセントについては、「業界用語の一般語化」が進み、外来語というだけで0型アクセントに発音する方向に変化するという推測もある(上野善道2002)。

確かに、未知の外来語は0型に発音する傾向が見られないわけではない。しかし、6.の結果をみると、外来語が増えて0型アクセントが急増することはないとみられる。また、若年期からの英語学習が進んでいることを考えると、原語のアクセントの影響がますます強くなり、4拍語までは、1型を中心に増加する可能性が大きいのではないと思われる。特殊拍直前にアクセント核の来る型も増加するであろう。5拍以上は、一般語と変わらずに-3型が増えると思われる。

今回は、外来語アクセントの考察のみをおこなったが、他の語種での音節構造とアクセントの関係については今後の課題としたい。*HLLL*構造でも、外来語では「ソックス・ボックス・ファックス」など1型か0型になるが、「しっかり・がっちり・ぼっかり・ほっぺた・ちっぽけ・まっぴら」などでは3型になるなど異なる傾向を示すことから、個々の特徴を明らかにしていきたい。

参考文献

- 秋永一枝(1999)「アナウンサーアクセント調査について」(『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂⑧)
- 秋永一枝編(2001)『新明解アクセント辞典』三省堂
- 秋永一枝(2002)「東京語の発音とゆれ」『現代日本語講座』第3巻 明治書院
- 浅野真紀子(1999)「外来語におけるアクセント禁止領域とアクセント型の変化」『言語学と日本語教育』くろしお出版
- 上野善道(2002)「アクセント記述の方法」『現代日本語講座』第3巻 明治書院
- 遠藤邦基(1969)「外来語アクセントの性格」『光華紀要』7
- Kubozono, Haruo(1996) Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation. 『音声学会会報』211
- Kubozono, Haruo(1997) Lexical markedness and accent: A nonderivational account of Japanese compound accent. *WCCFL* 15, 273-287.
- 窪菌晴夫・太田聡(1998)『音韻構造とアクセント』研究社出版
- Kubozono, H., Ogawa, S.(2004) Emergence of Unaccented Words in Japanese. *Speech Prosody*. 33-36.
- 佐藤久美子・坂本(兼築)清恵・松本博文(2003)「英単語獲得に与えるカタカナ語のなじみ度」『学術研究所紀要』9号
- 篠原みゆき(2001)「日本語の外来語におけるアクセントと音節構造—特殊モーラとアクセントの関係」『日本語・日本文化研究』11
- 柴田武(1994)「外来語におけるアクセント核の位置」『国語論究4 現代語・方言の研究』明治書院